

グランド・キャニオン

今回の旅で思い知ったのは、私にいかにアメリカの地理の基礎知識が欠けていたか、につきる。恥ずかしながらサンタ・フェを去って、次の宿泊地の、フラッグ・スタッフに付くまで、私はこの小さな町がかのグランド・キャニオンの南側の入口の一つになるということ知らなかった。また、あの大統領の顔で有名なマウント・ラッシュモアが、サウス・ダコタ州のラピッド・シティにある、ということも実際にラピッド・シティに到着するまで知らなかった。両方とも宿泊所を慌しく決めて行ってみたら、エッここがああ、という怪我の功名というか、瓢箪から駒みたいな成り行きだった。ホント、決して自慢できない話であるけれど。

8月19日フラッグスタッフの宿に着いて、チェックインをしている時、眼に留まったのが、「グランド・キャニオン日帰りの旅」のパンフレット。聞いてみると、10名くらいのグループで小型バスの運転手がガイドを兼ねる、ランチも込みで、85ドル。自分の車で運転するより、ガイド着きのツアーでグランド・キャニオンが見られるなら、と、申し込む。幸い、明日のツアーに参加出来るとのこと。（この点、ニューオリンズでもそうだったが、実に簡単に安くツアーに参加出来る。）



翌日9時出発といわれロビーに行くと、バスは遅れていて、9時30分頃になるだろうと。これもアバウトだ。実際、バスの運転手（ジョーといった）が現れたのは10時近く。バスに乗ると、既に7名は乗っている。お互いに名乗り、挨拶をして、隣町に行く。そこで2軒のホテルに寄り参加者を乗せたら、小さなバスは満杯となった。私は、満席をいいことに助手席に陣取り、ジョーの説明をシッカリ聞くことにする。グランド・キャニオンはカレンダー、旅の本、世界の秘境といった出版物・印刷物にあらゆる角度から撮り尽くされているが、それでも、尚、アメリカ人には故里みたいな場所ではないだろうか。ジョーは学校の先生だけあって説明が丁寧で、しかも生徒相手みたいにゆっくり教えてくれる。奥さんと二人暮らしで、夏休みはツアーで稼いで、早く子供のいる家族にしたいという。

大自然とは言葉三字ではあるが、グランド・キャニオンを訪れて、初めて大自然とは何を意味するのかというのが感覚的に掴め始めたと思う。ロサガの無い人が、「グランド・キャニオンがどうやって出来たか知ってるか？ユダヤ人が1ペニー谷底に落としたんだとよ。」(ケチなユダヤ人が落としたお金を探して掘起こしたのがあの峡谷だということ)などという、いわゆる人種ジョークの種になるのとは全く関わりなく、雄大にして典雅、勇壮にして繊細な峡谷を眺めていると、日頃のストレスが実にバカバカしいことに思えてくる。岩肌に刻まれた太古からの時間の皺が人間の愚かさを哄いつつも抱きしめてくれている、という思いにとらわれて何度シャッターを切っただろうか。



ジョーは、数え切れないほど何度も旅人を案内しているに違い無いが、撮影に適した場所、内緒にしているという場所に案内してくれた。中でも、峡谷の挟間に丈の高い椰子みたいな植物があって、それは100年に一度しか花を咲かせないという言い伝えの稀な植物だと教えてくれた。ところが、学者が本当に100年に一度咲くのかと調査してみたら、実は植物自体は30年で枯れ死んでしまうのが判った、と白髪三千丈みたいな話も紹介してくれて皆を笑わ

せる。



これが 30 歳？
の植物

バスに乗っていると、時々動物がノツタリと出て来るのに出会う。

グランド・キャニオン(および、その後の多くの自然国立公園も)では、動物は完全保護されていて、例えば、動物を傷つけてしまったら犯罪になる、というところまで人間側を律している。ジョーは、「この辺りのハイエナは、だから人間を何とも思っちゃいないんだよ。僕はやっぱり動物は人間を警戒するべきだと思う。それが自然ではないだろうか。」と本音を漏らしていた。

6時にホテルに帰り、豊かな自然を満喫した一日であった。

パサデナの邸宅

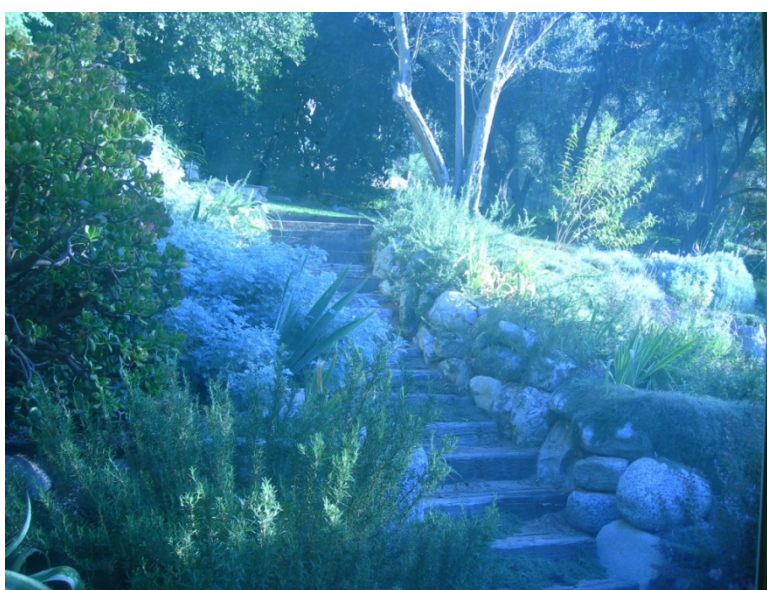
思いがけず、グランド・キャニオンのかけらを見る事が出来たのに気をよくした次の日の、運転席に戻って炎天下のモアブ砂漠を横断した私は、ようやくカリフォルニア側の街に到着してから、パサデナに住む真由美さんに連絡を入れてみた。

昔、モリタと一緒に働いていた真由美さんは、ご主人とパサデナに移り、優雅な暮らしをエンジョイしていると昨年遊びに行ったマユさんから聞いている。マユさんが真由美さんを訪れた際、「宮平さんがもしパサデナに来る機会があったら、是非お立ち寄りください。」との伝言をもらっているのをタテに、厚かましくも連絡を入れてみる。

真由美さんは在宅で、是非お出で下さい、との言葉に甘えて、宿もパサデナ近くに取り、図々しくもお訪ねした。ご主人の化学調査官ピーターは、以前、拙宅にお招きしたこともあり、話題の豊富な人だという印象があったので、二人に合うのが嬉しかった。

パサデナの南は、サン・マリーノという高級住宅地で、近くにはリッツ・カールトン・ホテルもある。真由美さんの家はそんな住宅地の一角で、丘の斜面を葡萄園・藤棚を眺めた庭園はピーターの労作だという。二人に歓待され、離れの部屋で是非泊まっては、というのに甘えてホ

テルはキャンセルして、二晩お世話になってしまう。次の日は8月22日、世界最大と言われるヨットのマリーナ(マリーナ・デル・レイ)に行き、西海岸の海辺に足をつけ、旅の前半終了を噛みしめた。その夜は、ピーターが卒業した Cal. Tec(加州工科大学)の同窓バーベキュー大会があり是非一緒にと言われ、又もやご馳走になる。真由美さんは、保険など辛気臭い仕事よりも、インテリアやファッションの方面に才能があると私はかねがね思っていたが、邸宅内の細部を見て、やはりセンスの良さが光っていると思った。庭園の照明は夜中も柔らかな光を植栽に投げかけ、夢心地を誘う。いつの間にかウトウトとしたと思ったら翌日の8時を過ぎていた。夫妻の親切に甘えてしまったが、暇を告げて海岸沿いに北上をはじめた。後半戦開始だ。



Pasadena の
友人宅庭園

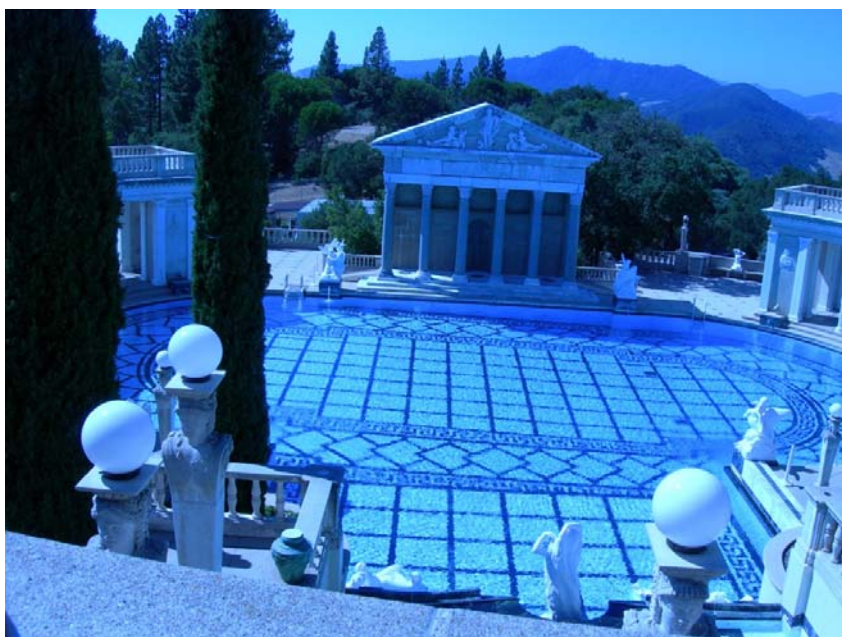
ハースト・キャッスル

「薔薇の蕾」という戯曲がある。映画では「市民ケーン」という題名で、オーソン・ウェルズ主演の傑作。この作品は、実在の新聞王ウィリアム・ランドルフ・ハースト氏をモデルにしているが、映画に出てくるお城みたいな豪邸も実在していて、モンレー近くのサン・シメオンにある。新聞王で大富豪、私生活ではコーラスガールあがりの夫人との間に5人の男の子を設け、その後別居、女優を愛人としたが、後年この愛人がハーストさんの借財を肩代わりしたほどの資産家となった。また、この邸を設計監督したのは女性建築家で、気まぐれなハースト氏の依頼に黙々と応えた。とこうして見ると、ハーストさんという人は、分野別に有能な女性を選抜する能力には長けていたのではないだろうかと思われる。

とはいえ、ここに到着するまでの道の悪いこと、長いこと。ハイウェイ1号と、名前があるのも不思議なほど、海岸沿いを蛇のようにクネクネいつまでもドライブして、いつまでも着かな

い。途中で何度も行き過ぎではないか、と地図を見ながらのドライブとなった。晴れていれば絶景の海も、曇天で寒くなってくると不吉な霧に覆われているように思われる。でも、この海沿いハイウェイは、カリフォルニア州自慢の観光道路である。ようやくハースト・キャッスルに到着した時は、実際疲れ果てていた。

それでも、入場館は多くの観光客で賑わっている。ここも国家の経営であった。(多くの昔の豪邸の子孫は税金が払えなくなると、国家や州に寄付の形で手放すケースが多い。)現在ハースト家の人達は敷地の中に借家しているそう。



ハースト邸の
屋外プール

ここも、ツアーが4種類ある。一般向きのツアーに申し込む。さて豪邸はと見回すと、この建物は入場手続きとギフトショップのみ。豪邸は遥か山の上。専用バスで山の頂上まで緩々登る。15分間バスで揺れる間、説明のテープが流れる。建築にどれだけ時間とお金が掛かったか、ハースト氏が気分屋で、何度設計を変えたか、(プールなどは3回も造り替えている)ハリウッドの俳優・女優がどれだけ招待を待ち侘びたかという話をする。かのキャサリン・ヘップバーンがハースト邸の招待を断ったのは、自分の人生で唯一心残りだった、と、述懐したとか。金に糸目をつけない建築と内装は趣味の良さと文明の造詣の深さが随所に見えるが、悪く言えば、ヨーロッパ文化の真似と金持の所有欲を実現したらこうなる、というカタログみたいな屋敷でもあった。エジプトから持ってきた猫の彫刻、大食堂の内部を彩るヨーロッパ貴族の旗の列、イスタンブールの地下貯水池を真似た深夜用のプールとか。ここは深夜に逢引をした恋人達が薄暗い明かりの中、真っ裸で戯れたのだそうで。(それを有難がって入場料を払って見に来るバカが私たち。)



Pacific Coast, CA